
指きりの奏

螺威

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
指きりの奏

【コード】
N1112C

【作者名】
螺威

【あらすじ】
幼い頃の約束、のお話。大きくなった今も覚えていますか…？的な感じですよ

く始まりの音く

ゆーびきーりげーんまーん

その歌にのって幼い少女と少年は小指をしっかりと絡ませ、上下に振る。

色素の薄い長い髪を見るのが少年は好きだ。

いつもの林で木々の影の中隙間から漏れる日の光り。

少年から見た彼女はまさにそれ。

そして少年と少女を黙って見守る黒髪の少年。

木々を縫うように淡く優しく吹く風、少年にとって、少女にとって彼はまさにそれ。

少女と指を絡ませ、頼りない笑みを浮かべる少年はされるがままに少女の歌に合わせて動くだけ。

茶色い髪は小さく揺れ、同じ色の瞳も揺れる。

彼女が歌う約束の定番の指折りげんまん。

その一部の綴りである『嘘ついたら針千本』を彼女は好まない。

ゆびきりげんまん、の綴りを延々楽しそうに繰り返す。

その軽快で楽しげなリズムが止んだ後、少女は約束を口にする。

げんまん……、と彼女の歌う声が途切れた。

いつもはここで少し迷うのだが、この時ばかりは少女の顔は笑顔で、確認の声音だった。

繋いだ小指を高く高く、太陽に近づけるように掲げた。

「また、会おうね？」

その幼く高い声は、小指を繋いでいる少年にだけでなく、横で黙って見ている少年にも投げられた。

茶髪の少年は小さく、照れ臭く、けれど微かに頬を紅潮して頷いた。

黒髪の少年は当たり前のように笑顔をむけた。

林の中、木々と好き勝手生えている草の間から聞こえてくるのは鈴虫の合唱。

夏は去り、秋が来る。

指を絡ませ笑っていた少女は「約束したよ？」と別れを惜しむ、再開を望む曖昧な笑みを浮かべる。

そうして、少女は薄い茶髪を揺らして最後の言葉を紡いだ。

「…ゆーびきった」

最後の一文の所で、小指は解け一つの約束は結ばれた。

曖昧で頼りない約束。

鈴虫が静かに鳴いていた、少し肌寒い夏の魔法。

一話：終業式

記憶なんか増えたら増えた分、昔の記憶は薄れていってしまっ

けれども、一度記憶の破片が零れて来たら残りの破片が気になってしまっ

キーワードは、二つ。

一つは鈴虫の声。

もう一つは、何かの歌。

不確かな曖昧は記憶にプレッシャーをかけて、余計に蓋をしま

鈴虫と歌が思い出せと訴える。

歯車が幾つか、足りない。

木で出来た机にもたれ掛かり、椅子をギシギシと煩く軋ませて先生の話が終わるのを待つ。

その様は早く終われと、先生を急かしているのだから相手は子供相手のプロ。故に少しも動じてくれない。

田舎町の小学校。

そんな所に先生は一人しかない。

だから一年生から六年生まで合わせて二、三十人を一人でみる。

また、その女性先生は一人一人に通知表を渡しながら丁寧に夏休みの注意事項、成績のコメントをするものだから尚更時間がかかる。

まだ四年生までしか通知表を渡されていない。

六年生である栞は必然的に最後の扱いになる。

茶髪の短い髪をがたがたと言う音と共に揺らす。

外ではミンミンと蝉が鳴き、鬱陶しい位に太陽が晴れ渡っているのに自分達は未だ室内。

はあ、とあからさまに溜息をつき隣の席の子に話し掛ける。

栞は早く帰りたいオーラを濃く出して隣の席に座る六年生唯一の男友達であり、このクラスの委員長でもある黒髪の少年の肩を鉛筆の尖った方で突いた。

机に両肘をあてて自分の番が来るのを待っていた少年は栞の唐突な攻撃に大して怒りもせず「ん？」と一言だけ声にして栞のほうを向いた。

栞は自分が彼だったらきつと一言一言は相手に文句を言う。

同じ六年生男児なのにエライ違いだと再認識。

彼の方が誕生日が早いせいだろうか？

「調さん調さん。貴方の予想では後どれくらいで終わりますかね？」

調、と呼ばれた黒髪の少年はにっこりと屈託なく笑い、しかしながら彼の口から出た言葉は菜にとっては辛辣な言葉。

「後30分位ですかねえ」

「ええっ！！なんでえっ!？」

先程まで握っていた鉛筆を机の上に放って、椅子の端の方に座り、調に食いつく菜。

隣の席だから相手の席の机に手を置く事は充分可能。

あはは、と調はわらい正面を向いていた体を菜の居る横へと向ける。

「今四年生まで来たから長くても15分だけど」

「…だけど？」

先生の話以外に何かあるのかと訝しむ栞。

そんな栞に笑みを零し、調は机の上に置いていた緑色のクリアファイルから一枚の紙を取り出した。

一見何かの表のよう。

ピラピラとそれを揺らして調は栞に笑んだ。

「夏休みの間の花の水やりとニワトリ小屋のお掃除当番の日程表
僕が通知表貰ったらすぐにお話するからね？」

にこにこ笑って嫌な事を言う友人に栞は目が点になり、思わず椅子から落ちそうになった。

不平の言葉を述べようと、栞は口を開きかけたのだけど「恵守君」と先生が呼んだ為それははばかれた。

どうせ悪い成績に溜息を突きつつ、栞は席を立つ。

「後で見せあいつこしようか？」

「絶つつつ対いやっ！」

いーっ、と力いっぱい否定して栞は席を立った。

小走りに一直線、先生の所へ走る。

て言うか正直言うといりません。

先生は女の人特有の優しい笑みで夏休みの注意事項を話してくれる。

はい、はい、と魂の抜けた状態で栞は返事を返す。

笑顔と真顔を交互に繰り返し、そして栞の最大イベントの通知表が渡された。

渡された瞬間引つたくる様に先生から通知表を貰い、素早く席に戻った。

がたがたっ、と荒っぽく椅子に座り先程の荒っぽさとは逆に小さく小さく通知表を開く。

ただ今心拍数上昇中。

「……………うあああ……………」

開いた瞬間固まり、後溜息。

家に帰ってからお母さんに怒られる事確定。

自分とすれ違いに通知表を貰いに言った調はあはははは、と笑いながら受け取った。

少しも顔に出ないから中味が読めない。

くそぞう。

さて、と教壇の前に立った調は例の当番表を片手に持ち皆に言った。

「えーとね、夏休みの間のお花の水やりとニワトリ小屋のお掃除、

「ご飯当番なんだけどー……一学年五日交代で行こうと思ってます。」

ミンミン鳴く蝉の音を背後に教室は蒸し暑さが増す。

窓を開けていても暑いものは暑い。

通知表を手にし、後は帰るだけの教室はダラダラダラと。

そんな中一人爽やかな調を見て栞は羨ましくなった。

暑さと上手に付き合っていていけるその方法を是非とも伝授してほしい。

それでねー…と調が細かい事を説明しようとした時、「面倒臭いー」の聲が一つ聞こえた。

声のした方へと栞が顔を向ければ右斜め前の低学年男女。

低学年っぽい言い草で夏休みの学校登校を拒否しようとする。

「イインチョー、週に一回水やってご飯あげればいいんじゃないですかー？」

一人そう提案すれば次々とそれに賛同し始める。

栞は特に賛成するわけではなく、むしろそれより委員長である友の顔色を伺う。

ちらつと教壇の方へ目を向ければ調は黙って笑顔で皆の雑談を聞いていた。

一通り聞き終え、皆の考えが理解出来たら口を開いた。

「そうだねー……………じゃあ皆もそうする？」

委員長の静かな、それでいて有無を言わさない理解不能な言葉にクラスは静まる。

表情が変わったクラスメイトに少しも同じず調は更に笑顔を貫き通す。

「皆にも一週間分まとめて水とご飯あげるからさ、それで生き延びてごらんよ？この暑さで水が変になるうがご飯が腐るうが知ったことじゃないもんね？」

もう充分調の言葉は理解出来ていて、調自身もそれを理解しているハズなのに「だって」と更に笑顔。

「面倒臭いんだもんね？」

その笑顔にクラスが真冬に戻ったのは言うまでもなく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1112c/>

指きりの奏

2010年12月14日14時44分発行